

第8回体の動きを高める運動領域部会記録

参加者 畠中 岡田 山本 坪根 鈴木 宮内 藤井 土屋 大川

1 実証授業を終えて（坪根）

- (1) 実証授業後の授業（第6時）を振り返って
第6時は、第5時の「ポイント発見」に重点を置いた学習から「工夫する」に視点を変えて授業を行った。
- (2) 柔らかさ
引き続き、教師がリードしてどの部位が伸びているか、高まりの実感はあるか言葉をかけていった。ボール転がしでは、向かい合って行ったところ子供たち自ら工夫を考えていた。向かい合ってボールを転がして渡すときに、伸びる実感を味わっていた。
輪くぐりについては、工夫も見られたし、伸びの実感をする児童は増えたが、高さを求める児童がまだまだいたので、教師から行い方について言葉をかけていった
- (3) ボールキャッチ
相変わらず個で運動を行っているが、「姿勢」や「用具」の工夫をして高めていた。
- (4) バンブー
回転、友達と向かい合いながら息を合わせて行う姿が見られた。
- (5) 学習カードの効果について（アンケートを実施）
30人中22人が肯定的な回答。
- (6) 運動の選択について
スラッグライン・・・ゆっくり行う児童が増えた。
バンブー・・・回転、友達と息を合わせて行う姿が見られた。
ボール・・・引き続き、個で運動している様子。
※一部の運動（バランス・タイミング・力加減・リズムのどれか）しか経験しなかった児童がいたがこれはよいのか？
ボール転がししか輪くぐりどちらかしか経験しなかった児童がいたがこれはどうか？

2 実証授業で明らかになったことについて

成果	課題
①ロードマップは効果的であった。取り組みを子供主体で行うためには必要であった。学習の方向性を示すために効果的。	①問いと学習課題とのつながりをどのように捉えさせていくか。
②運動例の限定はよかった。	②学習課題の解決を実際の運動の行い方に移すための働き掛け。
③教師の言葉掛けが必要最低限であったことで、子供たちの主体性を引き出すことができた。	③最初にどの運動で何が高まるか教えるべきであったのではないか。
④学習過程「ポイントの確認」→「工夫」→「ポイントの確認」→「工夫」の流れは学びの定着に	④ゴールデンエイジや高まりの定義、工夫の視点はもう一度検討が必要。

有効だった。 ⑤学習カードは自己評価を行う上で有効であった。教師が意図していたことと子供が実感していたことがリンクしていた。	⑤教師の働き掛けをどのように提案していくか。 教師の働き掛けを「いつ」、「何を」、「どのように出すのか」提案していく必要がある。 ⑥全体の問いをためる場所があってもよい。(掲示物) ⑦第7・8時を「巧・柔の選択」にして、第9・10時は「力・持続の行い方を知る」にしていく。 ⑧第5学年で、全ての体力の4要素の運動の選択は難しいのではないのか。 ⑨第5学年と第6学年の学習内容の差別化をしてみると、学習はしやすくなるのではないのか？ 第5学年と6学年のつながりを考えていく必要がある。 ⑩「何が高まるかな？」という言葉掛けは、教師が教えるべきことだと考える。「この運動では、何が高まるかな？」という言葉掛けよりも、「どのように行えば〇〇は高まるかな？(目的)」、「どうしたら高まったと言えるのかな？」を考えていく方が動きを高める姿に直結すると考える。 ⑪現段階として・・・ 第5学年「工夫してから目的を確かめる」 「やってみてどうだった？」→「やってみて何が高まったのかな？」→「工夫した結果何が高まったの？」 第6学年「目的を決定して、運動を工夫する」 「何を高めたいの？」→「何を高めるために、どのように運動しているの？」 ⑫教師が言葉をかけすぎると子供は受け身になってしまうのではないのか？ ⑬運動の目的を指導することは、一斉一律の指導ではないのではないのか？ ⑭柔らかさは、目的が一緒だが、巧みでは、バランスなのか、タイミングなのか、リズムなのか、力の調整(タイミング)を高めるのか迷ってしまう。
--	---

3 抄録と夏季合研について

(1) 実証授業で明らかになったことをまとめる

(2) 学習過程の工夫について

自己評価する力が高まると、学習課題がより自分に合ったものへ変容していく。

『「問いをもつ」→「学習課題を見いだす」→「運動に取り組む」→「問いをもつ」→・・・』

(3) 教師の働きかけの工夫

- ・ 目的意識をもつことへの働きかけ
- ・ 動きの高まりの実感への働きかけ
- ・ 学習課題を活用・修正する働きかけ

(4) 学習資料の工夫

自己評価するときの視点を明確にすることで、児童自身が自己評価できるようになる。

(5) 部会としての自己決定について

これまで部会で考えてきたことは、自己決定を促す働きかけであったことが再確認できた。

自己決定できることで、自己評価することができる。

(6) 学習カードの有効性について

7割の児童が学習カードの効果について実感し、自己評価につなげていた。